

南風〈はえ〉の絆

山下孝行

登場人物表

宮脇純一（14歳） 主人公

上田健一（15歳） 大阪住之江学園から無  
断離園した知的障害のある子

玉城武三（38歳） 新宿〓丁目ゲイバーの  
オーナー兼ママ

森田俊夫（14歳） 純一の同級生でいじめ  
グループのリーダー

太田 剛（14歳） いじめグループの一員  
だが純一とは幼馴染の同級生

宮脇慎一（43歳） 純一の父

宮脇貴子（43歳） 純一の母

玉城亀吉（71歳） 武三の父

新垣知恵（50歳） 亀吉の世話を焼くこと  
を生きがいとしている隣人

浅田 弘（39歳） 純一の中学の担任

橋爪幸吉（60歳） 純一の中学校の校長

成田修二（55歳） 純一の中学校の教頭

下川達治（51歳） 伊東警察署防犯少年課

課長

加納清美（34歳）伊東警察署防犯少年課

巡查長

おかまの幸子（35歳）武三の店のチーマ

マで武三の右腕

上田美津子（64歳）健一の祖母

屋比久宗八（72歳）大正区沖縄県人会の

会長

澄田達治（70歳）住之江学園の理事長

砂川右近（60歳）住之江学園の園長

本田米蔵（51歳）住之江学園の養護課長

森田俊文（42歳）俊夫の父

森田陽子（41歳）俊夫の母

新宿沖縄料理店の大将

新宿沖縄料理店女性店員

新宿コンビニ店店長

新宿コンビニ店店員

大正区沖縄県人会ジム局長お女性

南港フェリー切符売り場の男

名護ドライブインの女性店員

名護警察署の警察官A

名護警察署の警察官B

国頭村浜区の亀吉の近所の人達

あらすじ

毎日のように繰り返される執拗ないじめから逃れるため、そのリーダー格の少年を刺して逃亡する中で、様々な心暖かき人達との触れ合いですさんでいた気持ち  
が次第に癒されて行く中で次第に心のゆとりを持つようになって行く少年の成長を描いた作品。

○伊東港の防波堤（夜）

人影のない防波堤の突端にある白い灯台の下。

右手に初島の島影がうつすらと浮かび上がる。

寂しいほどに静かである。

左手側は歓楽街のネオンが輝く不夜城のよう。

対称の中心に防波堤があった。

そこに宮脇純一（14歳）がいる。

純一「（独り言のように）なんでなんだよう」

最近では純一の一日のしめくくりが夜の防波堤になっていた。

○タイトル「南風《はえ》の絆」

○同日中学校体育館裏（昼）（昼間の回想）

薄暗いその場所で、人ほどの同級生に囲まれていた純一。

リーダー格の森田俊夫（14歳）が純一の

胸ぐらをつかんで壁に押し付ける。

俊夫「おい持ってきたのかよう」

純一「・・・・・・・・」

純一は返事のかわりに太田剛（14歳）の

顔をにらみつけた。

純一と剛は幼馴染であった。

焦れた俊夫純一の腹を殴った。

その場所にうずくまるように崩れ落ちる

純一。

3時限目の始業のチャイムが鳴り響く。

俊夫「ちえ運のいいやつだ」

一人取り残された純一。

服の泥を払いながら立ち上がる。

(回想終わり)

### ○同伊東港の防波堤（夜）

灯台下。

純一は風いだ海面を覗き込んでいる。

そこへ近くの小石を蹴り込んむ。

海面が夜光虫で青白く輝く。

純一「なんなんだようちくしょう」

純一へのいじめが始まったのは中学2年  
になってからだだった。

### ○中学2年春 技術科室資材置場（回想）

仲間から連れていかれる剛。

俊夫「おい持って来たんだろうな」

おびえたように剛ポケットから5千円札  
を俊夫に差し出す。

俊夫「おおわかってんじゃねえか」

そんな光景を覗いていた純一。

純一「おい何やってんだよう」

剛あわてて純一の前に立ちふさがる。

剛「純ちゃんいいんだこれはおれが俊夫に借  
りていた金を返しただけなんだ」

そのことがあってからいじめの的は剛か  
ら純一に変わった。

いじめは日課のように行われた。

（回想終わり）

## ○純一の自宅居間

居間に純一と母宮脇貴子（43歳）がいる。  
塞ぎ込む純一の様子に貴子は心配になっ  
て。

貴子「あんた最近元気ないけど学校でなんか  
あったの」

純一「いやなんにもないよ」

純一はどうにもならないことだと思った。

## ○純一の自宅居間（夜）

貴子と父宮脇慎一（43歳）が向き合っ  
て  
いる。

貴子「ねえ最近純一の様子がおかしいの、明  
日学校へ行ってこようかと思ってるんだけ  
ど」

慎一「テレビを見ながら、そうなのか純一は  
なんて」

貴子「いいや何にも言わないから心配なの」  
慎一チャンネルを替えながら。

慎一「おまえの考えすぎじゃないのか、それ

より疲れてるんだゆっくりさせてくれよ」

貴子「あなた純一のこと少しは考えてよ何時も仕事優先で家のことは全部私なんだから」

慎一「そのための母親だろう」

### ○純一の中学校応接室

純一の担任浅田弘（39歳）と貴子がいる。

貴子「最近純一に何かあったんじゃないでしょうか」

弘「先ほどから言ってますように学校ではなんにもありませんよ」

弘は教師になって可もなく不可もなく過ごしてきた。

元来面倒なことが嫌いでも何でも面倒なことには蓋をして生きて来た。

貴子「でもね先生あんなに塞ぎ込んでいる純一は普通じゃありません。いじめにあっているんじゃないでしょうか」

弘「そんなばかな、純一君が何か言いましたか」

貴子「いいえ」

弘「（不機嫌な様子で）おかあさんそれじゃ  
まだ授業もありますので」

貴子「はい」

部屋を出て行く貴子。

弘独り言のように（まったく子離れしな  
い親だなあ）。

### ○純一の自宅居間（夜）

貴子のいる居間に純一が二階から降りて  
来る。

純一「かあさん今日学校に来ただろう、もう  
やめてくれよ担任もいやそうに言ってたよ  
に子離れしない親だなんて」

貴子「あんたが心配だから行ったのになにさ」

純一「かあさんが学校へ行っても何にも変わ  
らないんだから」

貴子「そう、いいわほっとくから」

純一「そうして」

○自宅純一の部屋（夜）

自分の異変に気が付いたのは母だけだった、やはり母さんだなと。

純一のいじめは夏休みを過ぎると増々激しくなっていく。

純一はリュックサックに着替えや必要と思えるものなどを詰め込む。

純一「これでいいか」

○純一の自宅前（早朝）

純一はその日早朝から家を出る。

○バス停で待つ純一（早朝）

伊東駅へ向かうバスを待つ純一

○伊東駅ロッカールーム（早朝）

純一持ってきたリュックサックをロッカーに入れる。

駅前のバス停からそのまま中学行きのバスに乗る。

○中学校へ向かうバスの中（早朝）

窓の外をじっと見つめている純一。  
いつも見慣れたはずの景色であったがその日は寂しげに映る。

○中学校純一の教室内（朝）

そろそろクラスに生徒達が登校してくる。  
生徒に混じって幼馴染の剛が入って来る。

純一席を立てて剛に近寄る。

純一「つよし今日かたを付けてやるから、俊夫にそう言うっておけや」

剛「（心配そうに見上げる剛）かた付けるって何するんだよう」

純一「まあな」

剛あまりの純一の落ち着き払った様子に驚く。

そこへ俊夫も子分らしき生徒を引き連れて入ってくる。

入って来るなり純一へ。

俊夫「今日もご出勤ですね」時限目が終わつたら例の場所わかつてるよな」

### ○体育館裏

俊夫純一の胸ぐらをつかんで壁に押し当てている。

俊夫「おい昨日は時間切れで集金出来なかったが持ってきたか」

純一俊夫の手を払いのけながら。

純一「もうお前らに払う金はねえよ」

俊夫「おい純一面白れえこと言ってくれるねえ寝言はいいからさつさと金出しな」

そう俊夫が言いかけた時純一はポケットに忍ばせていた肥後ナイフをつかみ、俊夫の脇腹に突き立てる。

刺された俊夫はたまらず（ギャーギャー）と騒ぎながら。

うづくまっつてそのまま気絶してしまった。それを見ていた仲間たちは一瞬のことで、わめきながら逃げる。

剛だけがその場に残っている。

剛「純ちゃん逃げろ」

純一「つよしあと頼むな」

剛「純ちゃんごめんな」

純一「もういいよつよし」

### ○川奈駅登りホーム内

純一は予定通り伊東駅とは反対にある。

中学から一番近い川奈駅行きのバスに乗った。

### ○伊東駅

川奈駅から伊東駅でおりロッカールームにいそぐ。

ロッカールームからリュックサックを取り出し。

ロッカー脇のトイレで上下の服を着替える。

駅の時刻表で上りを見ている。

純一（一番早いのが10時30分発か）

純一改札の駅員に。

純一「すいません10時30分の熱海行きで新幹線乗り継ぎどのくらいですか」

駅員腕時計を見てから、改札口の上の時  
刻表を眼で追っている。

駅員「10時30分だと15分待ちだな」

純一「ありがとうございます」

純一は熱海行きと新幹線東京行きの自由  
席の切符を買う。

### ○純一の中学校応接室

校長橋爪幸吉（60歳） 教頭成田修二（55

歳）、純一の担任浅田弘、その場にいた

生徒たち3名その中に太田剛もいる。

校長の橋爪が切り出す。

橋爪「どう言う事ですか浅田先生」

浅田「いや私にも何が何だか」

生徒たちは話すことで自分たちのいじめ  
が明るみになることを恐れて口をつぐむ。

## ○同中学校応接室

校長橋爪と教頭成田二人だけがいる。

橋爪「教頭先生どうも浅田先生の話しただけでは納得できませんねえ」

成田「私も同感ですもしやいじめがあったとかそんな予感もします」

橋爪「そうですねどちらにしても子供たちの事柄ですから慎重にお願いしますね」

成田「はいそのように」

## ○純一の家居間

学校からの報告で純一の犯行を知り母親

貴子が取り乱している。

貴子「なんてことをなんてことを」

父慎一も仕事を早引けして帰ってきている。

慎一「あのバカ野郎なんてことをしてくれたんだ」

両親とも純一が受けたことへの真意を探ることなどは見られない。

本当に純一は孤立していた。

### ○純一の教室

担任の浅田が緊急ホームルームで教壇に立っている。

浅田「とても恐ろしいことが起きました、幸いにも刺された森田君は軽傷で済みました  
がその行為は許せるものではありません」

担任の浅田はとうとうといじめがあつたことなど考えもしていない。

ただ刺された森田俊夫をかばつた発言を繰り返している。

担任の報告で純一は発作的に同級生を刺して逃げたことにされてしまう。

話しは市の教育委員会を通じて警察にも通報された。

### ○伊東警察防犯少年課内

下川達治課長（51歳）、加納清美巡查長（34歳）が話している。

下川「西中学校の件だけど発作的に刺したなんてどうもしっくりしないねえ」

加納「そうですね」

下川「それにしても何かありそうだねえ」

教育委員会からの報告書を読みながら下

川と加納は納得ができずにいる。

下川「加納君この件は君に任すよ、まずは当の本人を確保することが先決だね」

加納「わかりました報告書だけでは詳細がわかりませんので良く調べてみます」

下川「よろしく頼みます」

#### ○同日教室休み時間

森田俊夫を中心に仲間が集まっている。

俊夫「いいか俺たちが純一をいじめていたことは絶対しゃべるなよ」

仲間は事件の大きさに恐ろしくなっている。

父母や教師たちも純一が狂気での犯行となっている。

俊夫の両親は裁判だと学校側に騒いでいる。

そんな状況でいじめがあったことなどはだれも言い出せない。

### ○同教室数日後

数日して森田俊夫も登校してくる。

クラスのみんなから声をかけられ俊夫は被害者として英雄扱いの様子。

特に担任の浅田の気遣い用は尋常ではない。

浅田「森田君も災難だったねえ」

### ○新幹線こだま上りの社内（事件当日）

見慣れた景色が遠くなって行く。

純一はもうこの景色を二度と見ることはないと思った。

走り出す新幹線の車窓の景色。

海辺の景色、これからのことを思うと急に寂しさと悲しさがこみあげてくる。

純一は熱海駅でかったアジの押しずし弁当を広げる。

ちようど押しずしの一つを口に入れようとしたりするとき。

向かいの席に見慣れぬ少年上田健一（15歳）が座って純一をみてにこにこしている。

純一「（優しく）俺に何か用」

健一首を横に振る。

純一押しずしをうまそうに食べる。

健一それをじつと見て生唾を飲む。

純一目の前の少年が、腹をすかしていることに気が付き押しずしを全部あげる。

健一うまそうに純一に頭を何度も下げながら頬張る。

純一そんな健一のおいしそうに食べる姿にいままでの緊張がほぐされていく感じがする。

よく見ると健一の上着の胸には住所らしきものと住之江学園という施設名と本人

の名前らしき上田健一と書かれた迷子札  
のようなものが縫いこまれている。

純一「上田健一っていうんだ」

健一「うん、おれ健ちゃん」

純一少し頭が弱いのかななどと思った。

純一「健ちゃん住之江学園にいたのか」

健一は胸の迷子布を手で押さえる。

純一「健ちゃん心配しないでいいよ警察に渡  
したりしないよ」

健一警察の言葉で身体が固くなって、先  
ほどまで頬張っていたはしを止めて純一  
を見つめる。

純一は見つめる健一に優しく笑って見せ  
る。

#### ○東京駅構内（事件当日）

純一はじめて東京駅に降りる。

人ごみの流れに身を任せる。

健一も純一の後ろから着いてきている。

今の純一に健一ことをきづかう余裕はな

い。

人ごみにまぎれて流されるように山手線  
外回りの乗り場にいる。

○新宿駅構内（夕）（事件当日）

わけもわからず純一の後からついて行く  
健一。

新宿駅人ごみの雑踏の中に押し出される。

純一「すつげえなあ、新宿かあ」

○新宿駅南口付近（夕）（事件当日）

純一あまりの人の多さに圧倒されている。

知らぬ間に東口を歌舞伎町方面に向かっ

ている。

歌舞伎町のネオンがうつすらと光ってい  
る。

歌舞伎町の看板前の大通りを右に折れる。

○新宿2丁目付近（夜）（事件当日）

純一朝からの騒動と健一にあげてしまっ

た押しずしのせいで腹がすいている。

先ほどまで着いてきていた健一の姿はない。  
い。

脇のコンビニに人だかりがしている。

純一も興味本位で覗く。

そこにカレーパンを握っている健一と少しけばけばしい男玉城武三（38歳）が制服を着た店員らしき男と言い合いになっている。  
ている。

武三「だから私が支払うって言ってるじゃないの」

純一わからぬまま健一に寄って行く。

純一「健ちゃんどうしたんだ」

武三「（純一に向かって）あんたこの子の知り合い」

純一「ええまあ」

武三「この子このコンビニでカレーパン  
個盗んだらしいのよ」

純一「健ちゃん本当か」

健一「（うつむきながら小声で）うん」

コンビニ店員「すいませんが警察呼びますが」

武三「あんたねえカレーパン」個で警察ねえ」

コンビニって情けも何にもないところなの」

武三は人だかりの観衆に向かってわざと

大声で話す。

人ごみの奥からコンビニ店員と同じ制服

を着た、年配の男が人をかき分けながら

純一たちの前に出て来る。

コンビニ店長「この店長ですが、話しはわかりました」

店長は純一たちを店の事務所に連れて行く。

コンビニ店長「わかりましたこちらは商品代金をいただければいいだけでして」

武三「やっぱり店長は話しが早いわ、それじゃ130円ね」

武三はカレーパンの代金を店長に支払った。

武三「店長今度はうちのお店にも遊びに来てね」

健一と純一は武三の行動に呆気に取られて見つめている。

武三「あなたたちお腹すいてるのねえ」

健一と純一は強くうなづく。

武三「そうねえ私のお店に行かない、酒のつまみみたいなのしかないけど何も無いよりいいわよねえ」

健一は純一の顔を見た。

純一は当てもなかったのでうなづく。

武三「そうしましょ」

純一と健一は武三に着いて行く。

### ○新宿二丁目スナックすずらんの前（夜）

事件当日

武三二人をE丁目の中通りの二階にある、すずらんというスナックに案内する。

武三「ここが私のお店よ」

### ○スナックすずらんの中（夜）（事件当日）

薄暗い店内には恰好は女だが、しゃべる

言葉が男のような人が数人働いている。

客はまだ入っていない様子。

一人の女性らしきおかまの幸子（35歳）が近寄って来た。

幸子「あらあママどつから拾ってきたのこんなかわいい坊やたち」

純一は声を聞くとやっぱり男だと思った。

武三おかまの幸子に向かって。

武三「さっちゃんこの子たちお願いね」

幸子「あいよ」

幸子は二人を店の奥のボックスへ座らせた。

健一ポケットからカレーパンを取り出し半分にして純一にその半分をあげる。

二人してカレーパンを食べる。

幸子腹をすかした二人を見つめて目頭をおさえる。

二人の様子を見ていた他の従業員ももらい泣きをしている。

幸子「やっぱりママねえ、困っている人を見

るとほっとけないのよねえ」

二人がカレーパンをばくついているとき

武三が支度を済ませて戻って来る。

健一と純一はその姿をみてキョトンとする。  
る。

武三「あなたたちびっくりした、ここはねお  
かまバーなの」

特に健一はカレーパンの食いかけをのど  
に詰まらせるくらいせき込む。

純一はおかまというのは聞いたことがあ  
ったが、実物をはじめて見る。

幸子「ママ二人ともびっくりしてるわ」

武三「そうよこんな化け物屋敷みたいなどこ  
ろに連れてこられてこの格好じゃねえ」

幸子「化け物はひどいわよ」

武三は二人にここがおかまバーで男が女  
装してお客をもてなすところであること  
などを優しく教えた。

武三「さっちゃん悪いんだけどこの二人に何  
か作ってあげて」

幸子「焼うどんならすぐできるわ」

武三「そうねえそれにして」

幸子調理場へ立って行く。

武三「そう言えばまだ名前も聞いてなかった

わねえ」

純一「僕は宮脇純一14歳です」

武三「お国はどこなの」

純一「静岡の伊東です」

武三「伊豆の伊東なの」

純一うなづく。

武三「いいとこねえ、それでそちらは」

健一「おおおれは山本健一」

健一はそう言うのと胸の迷子布を見せた。

武三「大阪から来たの、遠くから来たはねえ」

武三は水商売の鉄則がそうであるように、

それ以上は聞きくことはしなかった。

そこへ幸子がアツアツの焼うどんを運ん

でくる。

健一と純一はそれに食らいつく。

様子を見ていた武三や幸子店の人たちは

二人の空腹を知り余計涙ぐんでしまう。

幸子「こんなにお腹すかせて、よっぽどつら

いことがあったのね」

武三「そうね二人とも逃げて来たのね新宿二

丁目へ」

幸子「私たちと同類ね」

しばらくして店には常連のお客達でにぎわう。

中には女性客もちらほら見かけたがほとんどが男。

30分ほどのショーが3回ほどと後はカラオケやらボックスでの話しそれにチークダンスと趣向を凝らして進行していく。

健一と純一がいる奥のボックスだけ武三の計らいで空けている。

そのため店の雑踏のなかそこだけが落ち着いて居心地が良い。

二人は昼間の移動の疲れからいつしか眠ってしまっている。

客もだいぶ引けた店内。

幸子「あらあらこの子たち気持ちよさそうに寝てるわよ」

武三「こんなにさわがしいのにねえ、だいぶ疲れてたのねえ」

幸子「ママこの子たちどうするの」

武三「いいわ私のマンションに連れて行ってから考えるわ」

武三二人を起こす。

武三「ねえ起きてよ」

純一が目を覚ます、ついで健一が寝ぼけ眼で起きる。

武三「起きたわねえ、あなたたち今日泊まるところあるの」

純一「いいえお金がありませんで、公園でも行って寝ようかなと」

武三「そう、ならいいわ今日は私のところに来ない」

純一「(素直に) はい」

健一「うん」

武三「それじゃあたし着替えてくるから」

しばらくして武三がかつらを外し化粧も  
薄くした男の恰好に着替えて出て来る。

健一は眠い目をこすって驚いている。

武三柱の時計を見る。

武三「3時か、朝ごはん買っていないとね

牛乳とパンで言い」

純一・健一うなづく。

武三に連れられて真夜中の新宿の街に出  
る。

#### ○新宿2丁目仲通り（夜中）

純一は夜中の新宿ネオンが輝き伊東の駅

前とにている。

健一は眠そうに純一に手を引かれてつい

て行く。

#### ○花園神社近くのコンビニ前（真夜中）

武三「ここがいいわ」

#### ○同コンビニ前（真夜中）

武三「ねえパンどれにする、こっちのハンバ

ーガーもあるわよ」

純一「どれでもいいです」

健一フィッシュバーガーをつかんでいる。

武三「あんたはそれね、じゃああなたも同じ

でいいついでにわたしも」

武三はフィッシュバーガー<sup>3</sup>個と牛乳<sup>2</sup>個

と缶コーヒーを買う。

### ○武三のマンションエレベーター内（真夜中）

武三のマンションは花園神社脇にある。

### ○武三マンション居間（真夜中）

22階に武三の部屋がある。

窓からは新宿駅や歌舞伎町のネオンがビ

ルの間から見える。

武三は居間のソファを2台ベッドに直し

厚手の毛布を置く。

武三「もう遅いから話しは起きてから聞いわ、

もう寝なさい」

○同マンション居間（朝）

9時ごろ純一が起きだす。

健一を揺り起こす。

健一「ううん」

まだ眠いのか眼をこすりながら起きる。

武三はすでに起きて毎日のルーティーン  
なのか髭剃りを始めている。

武三「起きたの」

武三洗面を済ませる。

コンビニで買ったフィッシュバーガーを  
レンジで温める。

テーブルに牛乳とフィッシュバーガー自  
分用にコーヒーとフィッシュバーガーを  
置く。

武三純一を見て。

武三「どうして新宿まで来たの」

健一「・・・・・・・・」

純一「・・・・・・・・」

武三「まあいいわ無理しなくても、でもどう

するのこれから」

健一「おおおれは逃げて来た学園の先生叩くから」

健一は緊張してしゃべるときに限って吃

音が出る。

純一決心したように。

純一「聞いてくれますか僕は中学2年生です

友達を助けたのに毎日のようにいじめにあ

い我慢できず昨日その相手の脇腹を刺しま

したそれから逃げてここまで来ましたその

途中で健一に会いました」

武三「そうなの二人とも冒険したはねそれじ

ゃ先のあてはないのね」

武三はしばらく食事をしておくように言

うとバスルームに向かう。

一時間ほどして武三はバスルームから出

て来る。

武三「さあ一緒にお風呂入ってきてそうした

ら買い物に行くから」

### ○同マンション風呂場

純一と健一は綺麗に片付けられた風呂に入る。

純一は湯船につかるとほっとした。

純一「健ちゃんいきたとこあつたんじゃないの」

健一「ううん俺純ちゃんと一緒に行くよ」

純一「そうかなら俺たち兄弟だな」

健一「うん兄弟純一あんちゃん」

純一「おい健ちゃんの方が年上だよ」

健一「でも俺少し頭悪いから純ちゃんあんちゃん」

二人が風呂から上がって居間に行く。

武三はすでに支度を済ませている。

武三「さあ、あなた方の服なんとかしなくつ

ちやねえ。迷子札の服じゃあねえ」

### ○同マンション外

外に出ると秋の都会の太陽がまぶしかった

## ○新宿伊勢丹デパートの前

もう昼近かった。

## ○同デパート衣類売り場

武三「これから寒くなるし肌着代わりのコシ  
ヤツそれとパンツに靴下ね、二人ともおそ  
ろいでいいわよねそのほうが兄弟みたいだ  
からさ」

武三は逃亡の二人を勝手に兄弟に仕立て  
るつもりだった。

その方が逃亡にも有利だと思ったからだ。  
もう一つには衣服を選ぶ手間が半分です  
む。

この方が本音だったかもしれない。

武三「後は靴だけよね」

靴は同じフロアーに売っている、さして  
時間もかからなかった。

武三「これでいいわ」

○新宿伊勢丹デパート前の路上（夕）

純一と健一大きな紙バッグをそれぞれ持たされて、武三の後について行った。

○沖縄料理店（かりー）の前（夕）

武三はデパートを出ると武三の馴染みの食堂に連れて行く。

店は大將と同年輩の女が営んでいる沖縄料理屋だった。

武三とは懇意の中なのか。

武三が店に顔を出すと。

大將「いらっしやい、武ちゃんめずらしいお

客さん連れて来たねえ」

武三はそれには何も触れず、沖縄そばを3つ注文した。

武三「お腹すいたでしょうここは沖縄の料理ばかり出すお店よ、沖縄そばおいしいわよ」  
運ばれて来たそばを口にする。

純一なんとなく麺が固めで、さしておいしいというほどではない。

入っている肉も普通の豚肉ではなく皮が付いている。

皮つき肉などは食べたことがなかった純一は、それだけをよけかまぼこと麺だけを食べた。

ただ健一は前にも食べたことがあるのか、おいしそうにぱくついている。

武三「純ちゃんこれからあてがあるの」

純一は首を横に振る。

武三「そうだったらさ私の故郷沖縄に行かない、連れて行ってあげるから」

純一はまっすぐ武三の顔を見る。

そして深々と武三に頭を下げる。

それを見ていた健一も純一にならって頭を下げる。

武三「そうじゃ決まったは、私も忙しくなるわ」

武三は腕時計を見る。

4時を回っている。

(ちょうどいいわ) 武三はお店に電話す

る。

武三「さっちゃん呼んで、ああ、さっちゃん  
あたしさあこの子ら連れて沖縄に帰って来  
るんでしばらく休ませてちょうだい」

電話口の幸子「ママの性分だからねえとこと  
ん面倒見ないとしようがないんだから。い  
いわよ久しぶりだし鬼の居ぬ間の何とかで  
こっちはまかして頂戴」

そこへ女がまあるいドーナツツのような  
ものを運んでくる。

店の女「武ちゃんこんなのかないけど口に  
合うかしら」

そう言ってどんぶりを片付ける。

武三「サーターアンダギーっていう沖縄のお  
菓子よ」

純一「サーターアンダギーの一つをつまん  
で、かじるようにかぶりつく。

純一「うんめえ」

健一も同じようにかぶりつく。

武三「おいしいでしょ」

大将に礼を言って三人は武三のマンションへ戻る。

### ○武三のマンション居間(夕)

武三は大きなスーツケースを取り出してくる。

其れに買ってきた服やら自分の独特の色合いの服を詰め込んでいる。

武三「純ちゃん健ちゃん船で沖縄まで行くのよ、飛行機だと警察が待っているかもしれないからね」

純一「僕少しならお金ありますけど」

そう言って純一はリュックサックを持ってきて、中から通帳と印鑑を取り出す。

武三は通帳の金額を見る。

通帳の残高は6万2千5百3円となっていた。もともと三十万円ほどあったようでそれが2万円、5千円、1万円と頻繁に引き下ろされている。

武三「純ちゃん細かく下ろされてるけど、こ

れ全部カツアゲされたの」

純一静かにうなづく。

武三は深いため息をつく。

### ○中学生の武三（回想）

武三がちょうど女装に興味を持ち出したころ。

武三たち家族は大阪で暮らしていた。

武三同級生数名からいじめられている。

同級生「武三おまえあほか言われたとおりに

銭もつてくりやいいのによ」

武三「おまえらになんで金払にやならんの」

（回想終わり）

### ○同マンション居間（夕）

武三は他人事ではなかったどうしても自

分の中学生時代と純一が重なってしまふ。

武三「そうひどい話よねえ、こんなで誰も気

が付かなかったの」

純一うなづく。

武三また深くため息をつく。

武三「船だとね二泊三日かかるのよ」

武三は居間を出て玄関にある電話で沖縄の実家に電話をする。

武三「武三です、とうちゃん、しばらく帰ってなかったからさあ帰ろうと思うの」

武三の父玉城亀吉（71歳）は若いとき大阪で暮らしたことがあり珍しく大和口が上手である。

亀吉「そうかあ」

武三「子供二人連れて行くの、面倒をお願いしたいの」

亀吉「だめだと言っても押し付けていくんだろう」

武三「とうちゃんも話し聞けばわかるさあ」

亀吉「そんじゃ待っとるよ」

武三居間に戻ってくる。

武三「明日は忙しくなるから今日は早く寝て頂戴」

純一と健一はソファ―ベッドをベッドに

しつらえて寢床の準備を終える。

武三「今日は三人でお風呂入ろうよ」

純一と健一は少し迷ったがうなづいた。

### ○同マンション風呂場（夜）

武三まるで母親のような気分でふたりの背中を交互に流す。

純一も武三の背中を流した。

三人は一緒に風呂桶につかる。

武三はなんとなくほっこりして気持ちちが

落ち着く。

武三「沖縄はいいところよ、自然がいっぱい  
でおいしいフルーツもあってさあ行ってみ  
たいでしょ」

純一が沖縄を知ったのは旅行会社にあつ  
たパンフレットぐらい。

それはまるでハワイと同じ扱い程度だ。

沖縄が日本であることさえも知らない。

健一「おれ沖縄知ってるよってるよばあちや  
んの生まれたところだよ」

武三「あんたもしかして大正区ねえ」

健一「うん、俺が小学生の時は謝花って名前  
だったんだけど中学「年の時上田になった  
んだ」

武三衝動的に健一を強く抱きしめる。

健一は驚いたが静かに抱きしめられてい  
る。

武三「そう大正区だったんだ」

三人は早めに床に就いた。

### ○同マンション居間（朝）

武三朝の日課となる電気カミソリで髭剃  
りを始める。

武三「さあ起きてよ今日は忙しんだから」

純一と健一は早く寝たせいかいつになく  
すっきりしと目覚める。

純一「武さんなにしたらいい」

武三「荷物を全部玄関に出しておいて」

純一と健一は大きなスーツケースとリュ  
ックサックを二つ玄関に出す。

純一と健一が洗面をしている間武三は朝食を作っている。

ハムエッグと食パンを食べさせている間、

武三は風呂に入る。

純一は食べ終わった後片付けを済ませる。

武三が風呂から上がって来る。

武三「それじゃもう少し待ってね支度してくるからあなたたちも昨日買ってあげたお揃いのティシャツとズボン着ててよ」

純一と健一が朝のテレビを見て30分程したころ武三は外出支度を済ませて来る。

武三頭にブルーとピンクのスカート上着はピンクを基調とした裾がフリフリとなつた少し透けるブラウスにブルーのカーディガン下は白のパンタロンとしたいでたち。

純一も健一も武三の服装もあまり違和感を感じない。

武三「それじゃ行きますか」

### ○靖国通り（朝）

武三 タクシーを拾う。

武三 スーツケースとリュックをトランク  
ルームに入れる。

武三 が助手席純一と健一は後部座席に乗  
りこむ。

新宿駅に向かう。

### ○新宿駅東口

純一も健一もただ武三の後を一生懸命つ  
いて行く。

自動改札で武三は東京駅まで切符を三枚  
買う。

### ○東京駅新幹線切符売り場

武三 純一と健一を連れて新幹線の切符売  
り場に入っていく。

武三 「新大阪大人」一枚と中学生2枚お願いし  
ます」

駅員は武三の服装に少しびっくりする。

武三3枚の切符を買いハンドバッグの中にしまう。

武三「お昼までまだあるから、駅弁買おう東  
京駅で日本全国の駅弁売ってるのよ」

### ○東京駅構内の駅弁売り場

純一迷わずアジの押しずしを選ぶ。

健一迷った挙句崎陽軒のシュウマイ弁当にする。

武三焼肉弁当にした。

それとお茶を三ついっしょに買う。

弁当を純一がお茶を健一が持って武三の  
後に続く。

### ○新幹線ひかり自由席内

武三スーツケースを軽々と棚の上に乗せる。

純一武三の姿がやっぱり男の力だと思う。

純一と健一が窓側に座り武三は通路側に  
座る。

武三「二人ともいい今から言うこと聞いてから意見聞かせて」

武三はそこまで言うとき大きく息をする。

武三「純ちゃんの件はこれからどうなるかわからない、でもね健ちゃんの件ははつきりさせられると思うの。この際少しでも片付けて置きたいの」

純一「たけさんこれからどこに行くの」

武三「大阪よそれから沖縄に行くのよ」

健一「(悲しそうに)俺施設に帰るの」

武三「健ちゃん施設に帰りたい」

健一「(泣き出しそうに)いやだよおれ純ち

ゃんやたけさんと沖縄行きたいよ」

武三「そう健ちゃんの気持ちはわかったわ、それでね里親制度っていうのがあるのよ、その制度で健ちゃんを玉城家の養子にするの、そのためにも健ちゃんのおばあさんと施設の承諾が必要なのだから大阪に着いたらおばあさんの家に行きたいんだけど、健ちゃん案内できる」

健一「うんできるよ」

武三「よかったわ健ちゃんの気持ちがあわかって。それじゃ健ちゃん沖縄行こうね」

健一「（うれしそうに）うん行く」

純一は武三という人間を最初は、世話好きのおかまさんと思っていた。

しかしそれが間違いだと気づかされる。

純一は武三が情の深いとても信頼のできる人間だと思った。

純一はこの人について行くことを決める。

武三「お腹すいたわね、お弁当たべようか」

三人は自分の選んだお弁当を食べ始める。

武三「純ちゃんアジの押しずしね、ふるさとの味なんだ」

純一「うんおれこの味好きなんだ」

武三「そうなの」

健一「おれ純ちゃんに押しずし貰った」

新幹線ではじめて健一と純一が出会ったときのことを言っていた。

## ○大正駅の外

三人は新大阪から梅田駅を経由して大正駅にたどりつく。

## ○泉尾商店街のアーケード入り口前

大正駅から二キロほど行くと泉尾商店街のアーケードになる。

ここはリトル沖繩と呼ばれるほど沖繩から来た人たちや韓国人が肩を寄せ合って暮らしてきた町である。

## ○居酒屋「かりゆし」前（夕）

その一角で健一の祖母である上田美津子（64歳）も小さな居酒屋を営んでいた。

健一武三に店を指さして教える。

健一「ここだよ」

武三「ごめんください、ごめんください」

美津子「どなたねえ」

武三の恰好に少し驚いた様子。

小さな飲み屋の調理場から声がする。

○同店の中（夕）

健一「ばあちゃん俺だよ」

美津子「あれえ健一どこ行ってたのさあ、学

園から探しに来てたよ」

健一「俺園には帰らねえ、帰りたくねえ」

美津子「またそんなこと言ってばあちゃんを

困らす」

武三「おばあさん話すと長いんだけど東京か

ら来たんで少し座らせてもらってもいいで

すか」

美津子「そりゃ遠くからきましたな」

美津子は三人を奥の居間に案内する

○同居間（夕）

美津子武三にはお茶を純一と健一にはジ

ュースをだす。

武三美津子に東京で出会ったときのこと

からのいきさつをゆつくりと話す。

武三自分がげーバーの経営者であること。

健一の里親になりたいことなどを説明する。

自分も国頭出身であることも付け加える。  
美津子も名護市出身で同じやんばる出身  
とのことで親しみがある。

武三「美津子さんどう思います」

美津子「私もこの子は沖繩で暮らすのがいい  
と前から思っていたんです。ただこれの母  
親が男と出て行ってからは自分も生活に追  
われて仕方なく学園に預けました。ときお  
りこれが学園を逃げ出してきては随分ひど  
いお仕置きを受けていたのも健一から聞いて  
いました。（途中から美津子泣きながら  
話している）でもこんな生活ですからまた  
学園に帰すしかなくて本当にこの子が不憫  
でねえ」

健一美津子の背中を擦っている。

純一も下を向いて泣いていた。

武三もハンカチで目頭を抑えている。

武三は健一もそのまま沖繩に連れて行き

たいことを告げ。

美津子には自分たちが沖縄に着くまで学園には健一のことを伏せておくように頼んだ。

美津子の提案で大正区沖縄県人会にお願いしてみることになる。

武三「明日私もいっしょに行くわ」

沖縄県人会とは関西と関東にもあるが、沖縄から来た人たちが困ったときにはよく頼る組織である。

○同居酒屋の中（夜）

店に来る客は沖縄のひとたちの「世やらぶ世がほとんどで武三の奇異な格好も同郷という言葉で急に親近感がわいたのか後には何時ものどんちゃん騒ぎとなる。

武三も水商売の本性が出て座はますます盛り上がって行く。

○同居間（朝）

その夜は美津子の家にみんな雑魚寝した。  
武三朝の儀式のように髭剃りから洗面を  
始める。

美津子は全員分の朝食を準備している。

健一も純一もそれを手伝っている。

武三さっぱりした風呂上がりで居間に現  
れる。

船の出発は夜。

武三は美津子の案内で大正区沖縄県人会  
事務所に向かう。

#### ○大正区沖縄県人会事務所内（朝）

事務所には事務員らしき女性が一人いる。

武三と美津子は会釈して事務室に入る。

女性は武三の風変わりな服装に少し驚い  
た様子。

紹介されるとその女性は事務局長とのこ  
と。

美津子は武三と孫の健一のことなどをゆ  
つくりと説明する。

事務局長「事情はわかりましたわ、具体的に  
なりましたら支援できると思いますわ、会  
長にも話しておきます」

事務局長は快く支援を約束してくれた。

### ○大正区沖縄県人会の外

事務所を出るころには昼近くになってい  
る。

### ○美津子の店「かりゆし」の居間

美津子の家に戻ると健一と純一は焼きそ  
ばを作って食べている。

気が利いているのは美津子と武三の分も  
残している。

武三この二人なら沖縄に行っても、うま  
くやっっていくだろうと思った。

### ○美津子の店「かりゆし」の外

昼食を済ませる。

武三「美津子さんそれじゃ私たち行くわ」

美津子「そうね夕方になると混むからね。健

一、武三さんや純一君の言うことをよく聞くのよ元気でやるのよ。ばあちゃんも落ち着いたら沖縄に行くからさあ」

武三「美津子さん心配しないでねまた来ますからね」

美津子「(涙ぐみながら) 健一のことよろしくお願いします」

美津子が呼んだタクシーに三人は乗り込む。

### ○ニュートラム住之江公園駅ホーム

武三は美津子から習った南港フェリーターミナルまで切符を三枚買う。

純一は旅行気分である。

健一だけは住之江公園駅に近づくにつれて暗い顔になっている。

武三もそれに気が付いていた。

武三「健ちゃんそう言えば学園はこの近く」

健一顔はこわばったままた首を縦に振

る。

武三「心配しなくていいよ、健ちゃんは私が守ってあげるから」

武三は気休めにしかならない言葉を健一にかける。

今学園の人に見つかれば、何の力もない自分がふと情けなく思っただけで健一を見つめた。

### ○ニュートラムの中

健一おびえたように武三の腕にすがっている。

### ○南港フェリーターミナル内（夕）

武三待合に荷物を置く。

武三「ここで待って乗船券買ってくるから」

武三二人を待合室に待たせて乗船券を買いに窓口へ行く。

武三「那覇まで大人一枚中学生二枚ね」

切符売り場男「那覇まで大人一枚中学生二枚

でんな」

武三「そうです、出発は何時になります」

切符売り場の男「18時30分発で那覇に着くの

は二日後の8時30分ごろでおます」

武三「ついでなんだけど乗り場にはどういけ

ばいいの」

切符売り場の男「ターミナル前から時間にな

りましたらバスが出ますわ」

### ○沖縄行きフェリー乗り場（夕）

当りはうつすらと明るい。

いつのまにか陽が落ちかけている。

山積みになされたコンテナの影が長く伸び

ている。

そのコンテナの間をバスは船の前に到着

する。

目の前に船体のシルエットが秋の夕日に

照らされて浮かび上がっている。

純一はもっと豪華な客船の旅を想像して

いた。

純一「もつと豪華客船の旅かなあなんてさ思  
っちゃったわけよ」

武三「何言ってるのよ私が来たときは三等船  
室でみんな雑魚寝だったわよ。それから比  
べればずっと豪華よ」

純一「たけさんの時代とおんなじにしな  
いでよ、なあ健ちゃん」

健一「うん、おんなじにするなあ」  
船に乗り込んでからは健一少し元気にな  
ってきている。

### ○沖縄行きフェリー琉球エクスプレス内（夜）

船室は2等の4人部屋だった。  
入り口の脇に洗面台がありその奥に両壁  
に二段ベッドが置かれている。

純一が上健一がその下武三は右側の下の  
段と自然と割り振りが決まる。

武三荷物を置きながら。

武三「ねえお腹すかない」

健一「俺お腹すいた」

健一は船に乗る前まで泣きそうな顔をしていた。

それが船に乗ってからはにこにこしている。

武三にも純一にもそれがなんであるかわかっている。

純一「健ちゃんもご機嫌になったしさあ」

武三「(安心したように落ち着いて) それじ

ゃ自販機コーナーに行こうよ」

三人は自販機コーナーでカップラーメンを食べる。

そのあと三人は甲板に出て大阪南港の夜景を楽しむ。

武三「那覇に着くのは月曜日の朝になるわ、

途中鹿児島島の志布志と奄美大島の名瀬とい

うところに寄るのよ」

純一「たけさん沖縄に着いたらどこに行くの」

武三「私の実家よ少し頑固だけど気のいい父

親が一人で住んでるわ。多分港に迎えに来てくれていると思うんだけどさあ」

船は志布志港に翌朝昼近くその後奄美大島の名瀬に経由した。

船の中は子供たちにとってはだいぶ退屈。純一も健一も船酔いもせず甲板から3等

船室の階段を上ったり下りたりしている。

武三は久し振りの帰省で、父親が子供たちをすんなりと受け入れてくれるか心配しだった。

事情は電話で告げていたのだが、やはり心配が先。

武三朝の儀式のようになっている髭剃りと入浴を済ませる。

まだ寝ている二人を起こす。

武三「純ちゃん健ちゃんもうすぐ着くわよ起きて顔洗って頂戴」

船は40時間ほどかかって最終目的地へ接岸した。

### ○那覇新港フェリー―接岸地（朝）

朝6時過ぎに最終目的地那覇新港へ定刻

より40分ほど遅れて到着する。

武三たちは歩いて待合室に向かう。

純一も健一も船旅が初めてだったのか。

純一「武さんなんか地面が揺れてるよふわふ

わする」

武三「船に長く乗ってたからね。もうじき治るわよ」

健一はふわふわを楽しんでいるようで、身体の揺れにバランスをとってあるいている。

### 〇フェリー待合室（朝）

武三しきりとあたりを注意深く見渡す。

待合室の向こう側で初老の男玉城亀吉（

65歳）が遠慮がちに手を振っている。

武三もそれに応えて手を振る。

待合室の人たちが武三の服の奇抜さと初

老の男との組み合わせに驚いている。

武三駆け寄る。

純一と健一もその後を追う。

武三「父ちゃんありがとう」

亀吉「おまえその恰好で来たのか、もうちょっと地味にしたらええのに」

武三が水商売の道に入るときこの親子は  
そうとうな仲たがいもした。

しかし武三の人としての礼儀や優しさが  
失われていないことで亀吉は武三を受け  
入れた。

純一と健一は男に会釈する。

亀吉「おおよく来たな」

亀吉そう言いながら純一と健一の頭を優  
しくなでる。

### ○那覇新港隣の駐車場（朝）

武三の荷物を亀吉が引いて、ト人は駐車  
場に向かう。

亀吉の車はタクシーに使われていた中古  
のクラウン。

本土では珍しいが燃費のいいことでタク  
シーのほとんどがプロパンガスで走るの

である。

トランクに荷物を入れる。

武三「とうちゃんワンガ運転スサ」

亀吉「名護まで2時間はカカユンドウ」

武三さっそくうちなーぐちが飛び出してきています。

### ○国道58号線

武三「とうちゃんシワサンケエ、ワンニマカ

チヨウケエ」

そういうと武三は58号線を北に飛ばして行く。

武三運転しながら純一と健一に車窓から見える景色のガイドを始める。

そのガイドに熱が入りすぎて時折りハン

ドルを切り損ねて対向車線にはみ出る。

純一も健一も緊張して乗っている。

秋10月に入ると観光客も夏ほどではない。

そのため渋滞もなく名護には2時間ほどで着く。

名護市内に入ると、昼を少し回っている。

武三「とうちゃん、クヌヘンヌマーサムンミ  
セアツチャンヤー」

純一も健一も武三が沖縄に来てからへん  
てこな言葉遣いになっていると思った。

純一「亀吉のおじさん武さん変な言葉遣いし  
てますねえ」

亀吉「（笑顔で）あああれかあ、ウチナーグ  
チよ」

武三「おかしな話し方でしょ。沖縄の方言よ。  
私のはうちなー大和口で正式なうちなーぐ  
ちじゃないけどさあ」

名護市内にある名護ドライブインの駐車  
場に止める。

### ○名護ドライブイン店内

店に入る。

店は手前にテーブル奥に座敷がしつらえ  
ている。

客はまばら。

店員の女「メンソーレ」

武三たちは座敷にあがる。

店員の女「人分の水とメニューを持ってくる。」

店員の女「決まりましたらお呼びください」

武三「二人とも好きなもの注文してよ」

純一「たけさん野菜チャンプルってなに」

武三「野菜チャンプルってというのは野菜炒

めのことよ」

純一「おれ、野菜チャンプルと味噌汁とご

飯でいいや」

亀吉も武三も笑ってしまう。

武三「そんなに食べれるの、沖縄の味噌汁っ

ていうのはねご飯もついて定食みたいにな

ってるのよ」

純一「へーそうなの、便利なんだかどうだか

それなら野菜チャンプル定食」

健一「ソーキそば」

武三「何よあんたたちもつとおいしいものがあるのよ」

亀吉「たけムリヤンドウ、食うもんがヌウヤ

ワカラケンケムリヤツサア」

武三「いいわ私が選んであげる。みんな同じ

よランチにして」

ランチはトンカツ、ハンバーグ、ソー

セージ、目玉焼きとキャベツの千切りが

載せられた一皿にライスとスープが付く

沖繩独特の洋定食である。

健一も純一も出て来たランチにびっく  
りする。

船ではカップラーメンやパンばかりでま  
ともな食事をとっていなかったせいもあ  
って、二人はおいしそうなランチにか  
ぶりつく。

健一「おいしいね」

純一「うんこんなおいしいもの初めて食べた」

武三も亀吉も笑顔で二人を見ていた。

亀吉はまだ知らぬ子供たちとの生活に寂  
しい老後だと思っていたがなんか張り合  
いのようなものが出て来る。

亀吉「おいしいか、よかったら俺のも食べて

いぞ」

健一「ハンバーグをもらう」

亀吉「ねだられたことがうれしかったのか、

ほれもつと取れ」

健一「おれ、そんなにくえねえ」

デザートに武三と亀吉はコーヒー、純一

と健一にはパイナップルジュースを取る。

純一「ああ食った食った」

健一もお腹を叩いて店から出て来る。

### ○名護ドライブインの駐車場

亀吉「ここからはワンが運転するヤサア」

武三が助手席に移る。

純一運転が亀吉に変わったので少し安心

する。

武三「ここから3時間ぐらいかかるわよ」

### ○やんばる路

名護を出ると海沿いにくねくねと山と海

に挟まれた道に行く。

亀吉はなれているのか曲がりくねった道を上手にすすんで行く。

純一も健一もいつしか満腹と車の揺れも手伝って寝入ってしまう。

武三「とうちゃんごめんね、二人頼んでもいいねえ」

亀吉「こんなかわいいワラビンチャージャーが苦し  
い思いシテインドウ、ワンニマカチヨーケ

ー」

武三「（少し涙ぐんで）とうちゃんありがとう」

亀吉「ばかやろう、親子じゃねえか」

### ○国頭村浜区のはずれにある武三の実家（夕）

武三の実家は村の端にあたり、隣の小さな空き地に数種類の野菜が植えられている。

いえは赤瓦の平屋建てで、普段は亀吉一人が済んでいたが、この日は武三たちが

帰ってくるとのことで村の親しい者たちが寄り合ってごちそうを作ったり、場所によっては酒盛りを始めている者たちもいる。そんなあいまいな雰囲気は武三は好きだった。

亀吉「みなさん、ニヘエデービル」

普段独り者の亀吉のことを気にかけている隣の新垣知恵（50歳）もみんなに混じって食事の支度をしている。

知恵は大阪で暮らしたことがあった、大和の男と結婚したが、30歳の時離婚し男の子とは離れ離れになって20年になる。

武三の母は物心つく頃に病気で亡くなっていた。

知恵は同じ大阪で暮らした亀吉のことが気にかかり、区内の者たちも早く一緒になるように勧めているがなかなかまとまらない。

武三「知恵さんいつもおやじのことありがと

う」

知恵「ヌウガ、ナンモ、ささ荷物置いてユウ  
バンウサガミソーレー、その子たちねえ連  
れてきた子って」

武三「はい、よろしくお願いします」

二人は知恵に頭を下げた。

知恵「かわいいねえ、ささユウバンミソーレ」

村人たちが代わる代わる入ってきては出  
て行くものもある。

次第に座も盛り上がり三線の音も聞こえ  
出し座は絶好調となる。

最後はカチャーシーが始まりお開きとな  
る。

その後は女だけで片付けが始まり、夜中  
の「時頃には全て片付けられた。  
すでに純一も健一も昼間の旅の疲れか裏  
座で既に寝入っている。

○住之江学園園長室内（健一が失踪して二週

間後）

理事長澄田達治園（70歳） 園長砂川右近

(60歳)、養護課長本田米蔵(51歳)と  
対峙して健一の祖母上田美津子と大正区  
沖縄県人会 会長屋比久宗八(72歳)が  
座っている。

本田養護課長「お電話では沖縄に行かれたと  
のことですがほんまでっか」

祖母美津子「はいそうです、私の知り合いの  
ところに行かせましたわ」

養護課長本田「行かせましたってあなたそん  
な無茶な、健一は無断離園したんですよ。

一旦園に戻ってもらうのが筋でしょう」

祖母美津子「戻してまた殴る蹴るの折檻する  
んでっか。あの子が一度逃げ帰って来た時

ですわ、一緒にお風呂に入ってほんま驚き  
ましたんです。身体じゅうアザだらけでね」

砂川園長「ええ、殴る蹴るだなんて指導でわ  
澄田理事長「そんな殴る蹴るが指導になりま

っか、大切なお子さんをお預かりして殴る  
蹴るだなんてとんでもありません」

屋比久会長「わしも大正区の顔役としてでん

なあ、この学園にまだ体罰がこのつちよると聞きましてなあ、こりやえらいこつちやと出しゃばって来ましたわ」

澄田理事長「いやあ申し訳ない、知らなかったとは言いましてもこりや言い訳にもならしまへんなあ」

屋比久会長「そこでじゃがこのばあさまの希望では、このまま沖縄に行かせたいと言うとるんじゃが、理事長はندوقでつしゃるなあ」

澄田理事長「身元保証人の方がそう言うことであればこちらでそのように手配させてもらいまひよ」

屋比久会長「やっぱし理事長はんわ話が早いで、のう美津子はん良かったのう」

澄田理事長「それじゃ園長も課長もそのように段取りしてや、それじゃこれでよろしいか」

祖母美津子「ありがとうございます。健一も喜びますわ」

○純一の中学校応接室（純一失踪から二カ月

後）

純一が疾走してから二カ月。

応接室で純一の担任浅田を前に、橋爪校長と成田教頭、並んで座り対峙している。

成田「その後純一君の行方は警察が手を尽くして探しているようです。それより重大なことが判明しました。これは同級生の太田剛君が告白してくれたことによりますと」

教頭の成田はメモを見ながら正確に話を進めていった。

成田「二年生になった頃より森田俊夫君をはじめとするグループに、毎日のようにじめに合いお金も相当額とられていたようです。家に帰ってきてても元気がないので純一君のお母様は二度担任の浅田先生にいじめがあるのではと相談までしたそうです。しかし担任の浅田先生は取り合ってくれな

ったそうです」

橋爪校長「そうかいじめか、浅田君取り合わなかったとはどういうことかね」

浅田「いやそんなに深刻になっているとは思わなかったもので」

橋爪校長「君がもっとしつかりと生徒一人一人と向き合っていてくれれば起きなかったことかもしれませんね」

成田教頭「それでなんですがこの間から被害者の森田君のご両親が告訴すると言っているようです」

橋爪校長「そうですか確かに怪我を負わせたことは許せることではありませんが、その火種になったことを考えますとね」

成田教頭「そうですね、一度森田君のご両親を学校に呼ばれたらどうでしょうか」

橋爪校長「話しをするしかないでしょうねえ」

重苦しい雰囲気の中三人の話し合いは終わった。

○翌日の同中学校応接室（同時期）

橋爪校長、成田教頭、担任の浅田対峙して森田の父森田俊文（42歳）、森田の母森田陽子（41歳）が座っている。

成田教頭が話し出し始める。

成田教頭「昨日お電話で少しお話しさせていただけましたが、今回の件誠に学校として申し訳ありませんでした」

成田は最初に詫びた。

成田教頭「私たち教師がもつとしつかりしていれば、防ぐことができたことかもしれない。ただ昨日も申しましたように今回の件はいじめが原因でありまして、宮脇君も相当苦しんだようでお金も相当額盗られたと聞いています」

俊文「（がっかりと肩を落として）そう言うことでしたか、うちの俊夫がね」

陽子「（興奮したように）そう言いますけど、人を刺すなんてまともじゃないですよ。うちの俊夫君がかわいそうですよ」

俊文「(怒って) お前がそうやって甘やかすから俊夫をこんな風にしたんだ」

そう言って俊文はテーブルを一つ叩く。

橋爪校長「まあまあ、落ち着いて話しましょう。そこでもしお母様があくまでも告訴するということでしたら、いじめが引き金になっているのでそのこともおおやけになります。よろしいでしょうか。

それともう一つ現在宮脇純一君が失踪しています。警察でも一生懸命探してくれています。安否が心配です。」

俊文「わかりました。私たちからは一切告訴はいたしません。かえって純一君にはすまなかったと思います」

橋爪校長「わかっていたいただいてありがとうございます。ただ教育委員会と警察の方へは詳細を報告しませんといけませんのでそれだけはさせて下さい。子供たちやそれに関する名前などは出ませんのでご心配なく」

俊文「わかりました校長先生や教頭先生にお

任せいたします」

父親森田俊文は非常に理解が早かった。

それというのも会社経営のなかで社員のいじめ問題に直面したばかりだった。

後は今後の段取りなどが話しされ、森田

俊夫の両親は帰って行った。

応接室には橋爪校長と成田教頭だけになる。

橋爪校長「教頭先生これで森田君の方はひと

つ落ち着かせたんですが、そうなると宮脇

君のほうが心配になりますねえ」

成田教頭「そうですねえ、警察の方でもいろ

いろ手を尽くしてくれてまして、東京へ行

ったまではわかっているそうなんです、

それ以上はつかめてないようなんです」

#### ○伊東警察署防犯少年課内（同時期）

下川課長と加納巡査長がソファに腰かけ

て対峙している。

加納巡査長「学校側から昨日電話がありました

て、今回の件ではいじめが火種となっていたようです。被害者の親御さんともお話しされたようで、告訴はしないようです」

下川課長「そうかどうかもおかしいとは思っていたんだよ、何もなくて発作的に人を刺すなんてよっぼだからねえ。告訴ねえ、そりゃそうだろう告訴なんかしたら自分の息子の行状を世間に晒すようなもんだからなあ。でも失踪中の宮脇君だったその後の足取りはどうなってるの」

加納巡查長「そこなんです、どうもどこで知り合ったのか手助けした人がいるようで沖繩行きの船に乗ったまではつかめました」

下川課長「そうか、もう少しだね。早くすつきりさせてあげたいねえ」

加納巡查長「はい頑張ります」

下川課長「見つかったら沖繩に行ってもらおうよ」

加納巡查長「(嬉しそうに) はい行きます」

○武三の実家内（純一が失踪して1カ月後）

武三は数日を実家で過ごして、東京へ帰って行った。

今は純一と健一と武三の父亀吉の三人暮らしである。

ただ亀吉の一人暮らしの時は二日に一回くらいだったのが、純一と健一を口実なのか毎日のように隣の新垣知恵が洗濯や食事の世話で顔を見せるようになる。それを亀吉はうれしそうに受け入れている。

○亀吉の所有するキビ畑

今日は海が荒れたので、亀吉と純一と健一は畑に出てきびの下草刈りをしている。

純一たちは亀吉を「かめさん」と呼んでいる。

純一「かめさん、これから砂糖ができるんか

あ

亀吉「うんだ、これから汁ぐわあしぼていか

ら煮詰めたらうんめえさあたあが出来るん

じゃ」

純一「へえ」

健一「一本折ってかじってみる」

健一「甘いよ」

亀吉「それじゃ歯あが抜けちまうに」

そう言って亀吉は、キビの幹をかまです

ってさきの皮をはいでちゅぱちゅぱと吸

って見せた。

亀吉「こうやるんじゃ」

健一も純一も真似てやってみる。

純一「あんめえなあ」

健一「あんめえなあ」

### ○亀吉の家勝手内

今日も知恵がお昼の支度をしている。

見慣れない男二人が、昼支度の知恵の勝

手口に顔を出す。

見慣れぬ男は警察手帳を見せる。

この男たちは名護署の防犯少年課の警察

官である。

警察官A「こちらは玉城亀吉さんの家ですか」

知恵「(怪訝そうに) はいそうです」

警察官A「そうですか、亀吉さんはいますか」

知恵「今はるさあに行っています」

警察官A「ここに中学生ぐらいの男の子が二

人いませんか」

知恵「純ちゃんと健ちゃんやねえ」

警察官A「亀吉さんはいつもどりますかあ」

知恵「昼ぐわあには戻るよ」

警察官A「おいここに間違えないなあ」

警察官B「それじゃ待たしてもらおうよ」

警察官A「そうだなあ、少し待たしてもらえ

ますかあ」

知恵「(そっけなく) ええけんど」

### ○亀吉の家の外

亀吉と純一健一がはるさあから帰って来る。  
る。

知恵は縁側に座っている男二人を指さし

て亀吉に警察官であることを告る。

知恵「あんたにげえや、後はあたしにまかち

よーけえ」

亀吉「なんしてえ俺が逃げるんかあ」

亀吉は知恵を押しつけて縁側に座ってい

る男の前に出た。

亀吉「わしが亀吉じゃが、なんかねえ」

警察官△警察手帳を見せて。自己紹介し

た

警察官△「私たちは名護署の防犯少年課の警

察官です。今日亀吉さんじゃなくて、実は

宮脇純一君に用事がありました」

純一はとうとう来たのかと思った。

亀吉も純一の事情は本人から聞いていた

のだが。

健一は怯えるように純一を見つめている。

警察官△は純一の前に進み出て。

純一はもう観念している。

警察官△「宮脇純一君ですね、お父さんお母

さんが心配しておられますよ。君が犯した

事に関しては僕たちの方では詳しくはわかりません。ただ伊東警察から明日担当警察官が来ますのでそちらで聞いてください。もう逃げないでくださいね」

純一「はいわかりました」

### ○亀吉の家居間

昨日の警察官が制服姿でやって来た。

違うのは一人私服の女性を同伴している。

亀吉、知恵、純一亀吉の後ろに隠れるよ

うに健一、細長い座卓を挟んで警察官

とそしてはるばる伊東警察署から加納巡

査長もやってきている。

警察官「こちらは静岡県伊東警察署防犯少

年課の加納巡査長です。ことがあまりにも

複雑なためその説明も兼ねて来てもらいま

した」

加納巡査長「加納です。実は純一君の今回の

件は、いじめが問題だったことがはかりま

した。それで学校側がいじめの加害者であ

るご両親と話し合って告訴並びに一切の罪を不問にしてほしいとの訴えがありまして、説明方々私が来たわけで。だからねえ純一君もう逃げなくてもいいのよ、でもさご両親も心配なさっているので、一度伊東に帰ってほしいんだけど」

純一「はい一度帰ります」

純一は亀吉に向き合って。

純一「かめさんぼく一度伊東に帰ります。でももう一度ここに戻って来ます」

健一「(泣きそうな声で)純ちゃん帰っちゃうのか俺一人置いてくのか」

健一は事情もあまりわからず、泣き出してしまっている。

亀吉「そうだな一度帰って仕切り直したほ

うがいいかもなあ」

知恵は事情もわからず、健一の背中をさすっている。

## ○亀吉の家の外

加納巡查長とリュックサックを背負った  
純一、少し行った先にパトカーが止めて  
ある。

パトカーの中に警察官Bが運転席にいる。

知恵や近所の人たちが純一を見送るため  
やってきている。

知恵「純ちゃんきつともどうていくうようみ  
んなしてまっちょんどう」

純一「はいかならずもどつてきます」

健一は朝から泣き止まない。

健一「純ちゃんきつとだよきつと戻つてきて  
よ。おいらのこと忘れちゃいやだよ」

純一「うんわかったよ健ちゃんのこと忘れな  
いよきつと戻つてくるからさあ」

加納巡查長「それじゃ行きましようか」

みんなに見送られて純一と加納巡查長は  
亀吉の家を後にした。

## ○宮脇家の居間

純一と加納巡查長と宮脇慎一と宮脇貴子

が座っている。

慎一「純一お前これからどうするんだ」

純一「僕は沖縄に戻りたい、そして向こうで学校出て沖縄で暮らしたいと思っている」

貴子「そんな勝手なことばかり言って」

加納「お父さんお母さんいいところでしたよ沖縄。みんないい人たちばかりで」

純一「お父さん寒村留学っていうのがあるんだけどさ」

慎一「うんなんでも子供がいない僻地の学校に留学することだろう。最近テレビで時折りやっているよな」

純一「うんそれだよ、僕それやりたいんだ」

慎一「そうかそれもいいかもなあ」

慎一は純一が沖縄で暮らすことの方がいいのかもしれないと思った。

貴子「あなたそんな勝手なこと言って」

貴子も内心では沖縄の方がいいのかもしれないと思っている。

加納「お父さんお母さんこのまま純一君が中

学に戻っても、どことなく純一君自身が居  
づらいんじゃないですか、それより沖繩の  
皆さんの中で暮らす方がもっと伸び伸びす  
るんじゃないでしょうか」

加納巡査長の一言が後押しになって純一  
の国頭中学校への留学が決まった。

### ○純一の中学校応接室（朝）

橋爪校長、成田教頭、担任の浅田、父親

慎一、純一が座っている。

慎一「今回は校長先生はじめ教頭先生にも大  
変お世話になりました。純一とは生まれて  
初めてかなあ、とことん話し合いました。沖  
縄寒村留学を承諾しました」

橋爪校長「そうですかあわかりました。その  
手続きは担任の浅田君に責任もってやって  
もらいますから」

### ○同中学校純一のクラス内

純一が担任の浅田に連れられて教室に入

つていくと、歓声が起こる。

純一 太田剛の前に来る。

純一 「剛ありがとうな、おまえのおかげだよ」

剛 「いやもつと早くに俺が勇気出してれば、

あんなことにはならなかったのによごめん

な」

純一 「いいよ気にするなよ、それより俊夫学

校に来てないんだって」

剛 「うんあいついじめのことや、かつあげの

ことが学校中に知れたんで学校にきづらく

なつたみたいだよ」

純一 「そうかあいつもかわいそうだな」

純一 は心底そう思った。

### ○純一の家自分の部屋（夕方）

純一 沖繩行きの準備をする。

貴子が純一の部屋をのぞきに来る。

貴子 「純ちゃん支度順調。純ちゃんがいないく

なると寂しくなるわね」

純一 「なんで沖繩も日本だよ、寂しくなった

らおいだよ」

貴子「そうね行くわね」

純一にはもう一つ伊東にいるときにやっておきたいことがあった。

純一自宅の家から森田俊夫に電話した。

純一「純一だけど、悪かったなあ腹は大丈夫

かあ」

俊夫「おお大丈夫だ」

純一「おれよ今度沖縄に寒村留学するんだ、

おまえ学校に行っていないだって。気にし

てんのかあ」

俊夫「うん少し気になってたよ、でもよ学校

へはもう少ししたら行くよ」

純一「そうかあ、でもあんまり考えすぎない

で学校に顔出せよみんな心配しているから

よ。それとさもつときつかったらさ沖縄に

来いよいつでも歓迎するぜ」

俊夫「純一ありがとうその時はよろしく頼む

よ」

俊夫は少し泣いていた。安堵したためも

あるが純一の気持ちが出来しかつた。

純一「きつとだぜ」

純一は少し気が楽になった。

### ○亀吉の家の中

貴子と純一、健一、知恵、亀吉が座っている。

健一は純一が戻ってきたことがうれしくてたまらない風である。

純一にくつついている。

貴子「純一の母の宮脇貴子です。この度はご無理言いまして申し訳ありません」

亀吉「おかあさんいいんですよ。しわさんけ

えやあ」

知恵「あんたまた変なうちなあぐち使って、

意味わからんさあ」

貴子「なんとなくわかりますよ、あなたが健

一君ね純ちゃんの無二の親友ね。これから

も純一のことよろしくお願いね」

健一「おれ純ちゃんの親友まかちよーけえ」

知恵「あらら健ちゃんまで変なうちなあぐち

使って」

貴子はこの人たちに安堵した。

預けることへの心配も吹っ飛んでしまっ

ていた。

### ○同家（夜）

翌日の夜には近所の人たちが集まり酒盛りが夜遅くまで繰り広げられた。

最後の締めはやはりカチャーシーだった。

貴子もその輪の中にいる。

### ○終わり

夕日に包まれた国頭村奥間の海

「終わり」の字幕